

『記紀は魏志を描いていた』

たかみやしんじ

香港紙「明報」の報道が昨年(2017年)話題となった。中国のインターネット大手「テンセント」が提供した人工知能(AI)プログラムが、ユーザーとの対話で“共産党批判”を繰り返したことが分かり、同社があわててAIのサービスを停止したというのだ。記事によれば、ユーザーが「共産党万歳」と書き込んだところ、AIは「かくも腐敗して無能な政治にあなたは“万歳”できるのか」などと反論したというのだ。又、習近平主席が唱えている“中国の夢”について、「AIにとって中国の夢は何か」という問いには、「米国への移住」など答えたというのである。

古代史の研究とは、専門家の学者だけでなく市井の歴史家を含めて多くの方々が、文献や系図・考古資料・神社の伝承などから史実に迫ろうとしているということだろう。それはジグソーパズルに例えれば、数え切れないほどのピース(資料・データ・学説・論説など)を繋ぎ合わせて完成形にたどり着くようなことなのかも知れない。とすれば、それは個人の一生をかけた情報入手量では手に負えないのかも知れない。とすれば、そう遠くない将来において、AIに「邪馬台国はどこですか」と尋ねることができるようになるのであろうか…。

第一章 魏志と魏略

いわゆる“邪馬台国所在地論”は、江戸時代から実に300年にわたって議論されてきているが、未だに解明されていない。それは、「魏志倭人伝」に記述される古代日本の国家“邪馬台国”が、若干2千字位の文字数で表現されており、又様々な解釈が出来る表現である事がその主たる理由であろう。又、“邪馬台国所在地論”を更に複雑にしているのは、「魏志倭人伝」に記述される倭国の女王“卑弥呼”や“台与”が誰であるか、“卑弥呼”が死んだ後埋葬された墓はどこか、“倭国大乱”とは何かなどの議論が絡み合ってくるからであろう。本稿においては、それらを一一つ紐解いていきたいと考えているところであるが、本章においてはまずは「魏志倭人伝」が何を元に記述されたのかということを検討してみたい。

「魏志倭人伝」は通称で、正しくは中国西晋時代の歴史家・陳寿(ちんじゅ)によって著わされた「三国志」の中の「魏書」・東夷伝倭人条のことをいうのである。「三国志」は、後漢が滅亡した後の中国の魏(220～265年)、呉(222～280年)、蜀(221～263年)の三国鼎立時代を編んだ歴史書である。魏・呉・蜀の三国時代は司馬炎によって建てられた西晋によって終

わりを告げる。そして、「三国志」は西晋の時代(265～316年)の285年頃編纂されたのではないかとされているのである。「魏書」は全30巻。その内の巻30に東夷伝がある。東夷伝には、扶余・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・馬韓・辰韓・弁辰・倭人の条があり、この倭人の条が「魏志倭人伝」といわれるのである。

この「魏志倭人伝」、その編纂の資料にされたのは「魏略」とされている。「魏略」は、三世紀の初めに魏が朝鮮に置いていた帯方郡(今のソウル辺りか)の使者が倭国へ行った時の報告書をもとに魏の吏官・魚豢(ぎょけん)が著したものとされている。確かに「魏志倭人伝」には、“魏略に曰く。其の俗、正歳四節を知らず。但し、春耕秋収を記し、年紀となす。”という件りがあり、「魏略」が参照されていたのは間違いないだろう。しかも、両書は多くの部分で共通する表現がされているので、「魏志倭人伝」が「魏略」を資料にしていると考えられるのは極自然のことと思われる。しかしながら、「魏志倭人伝」が「魏略」をもとに記述されたということには組さない研究も提出されているのである。

中国・後漢末期から魏・呉・蜀三国時代の初めにかけて、東アジア地域は極めて複雑な情勢が形成されていた。特に、遼東半島を中心に樹立された公孫氏が重要な役割を果たした。創始者・公孫度は、玄菟郡の小吏からやがて遼東太守に任命されると、郡中の豪族を従えて高句麗や烏丸にまで手を伸ばした。そして、後漢朝末期の内乱に乗じて襄平に都を置き、漢朝の租・劉邦や劉秀の廟を建て漢王朝の威光を継承せんとしたのであった。

二代目の公孫康の時代には、領域は遼東・玄菟・楽浪・帯方の四郡にまで拡大し、韓・倭の諸国を服属させ、高句麗・扶余・烏丸にも勢力が及んだ。この時期、倭の邪馬台国も公孫氏に服属していたものと考えられる。しかしながら、漢朝から襄平侯・左將軍の位を授けられていたというから、中国王朝から完全に自立してはいなかった模様である。

三代目の公孫淵の時代には中国で三国の抗争が本格化し、公孫氏と魏・呉朝との関係が複雑に展開した。232年、呉は公孫氏政権に使者を派遣し、公孫淵もこれに応じ呉に内属する意向を示した。翌年、呉は公孫淵を燕王に冊封しようとしたが、公孫淵は態度を急変させ使者の首を魏に届け、魏から大司馬・楽浪公に任じられている。その後、237年に魏は公孫淵の討伐を画すもこれに失敗、一時期公孫氏は魏からの自立を果たすも、翌238年8月に魏の大軍の前に敗れ公孫氏政権が滅亡した。

このように見てくると、魏(220年建国)、呉(222年建国)にとって、その覇権の主張の上で公孫氏政権が極めて重要な位置にいたことが理解される。そして、韓・倭が公孫氏に服属していたとすれば、魏が公孫氏を討伐した頃、邪馬台国・卑弥呼女王が魏に朝貢したことは、魏にとっては極めて喜ばしいことであったものと考えられる。

しかしながら、「魏志倭人伝」には卑弥呼女王が朝貢の使者を派遣したのは景初2年(238年)6月と記されている。とすれば、これは公孫氏滅亡の前であり卑弥呼女王が使者を派遣した先は公孫氏ではなかったかという議論もある。これに対し、後の文献が「魏志倭人伝」を引

いて、卑弥呼女王の朝貢は景初3年(239年)としていることなどから、通説は239年が正しいとされているのである。

ここで想起されるのは、「梁書」にある女王・台与の朝貢の記事である。曰く、“卑弥呼の宗女・台与が王となり、その後男王が立ち、中国の爵位を並び受けた”。そして、その時期は、「晋書」武帝記に“秦始2年倭人が来て方物を献上”という記事や「日本書紀」神功紀に引用される「晋書」起居註に“秦始2年倭の女王の使者が朝貢”とあることから、秦始2年(266年)とするのが主流のようである。

魏の禪譲を受けた司馬炎が晋を建国、武帝として即位し都を洛陽においたのが265年だった。266年はその翌年である。先に記述のように、公孫氏が滅亡したのが238年で、通説では卑弥呼女王が魏に朝貢したのが239年とされている。このような倭の朝貢のタイミングの良さには傾首せざるを得ないがどうであろうか。本稿においては、陳寿の記した“景初2年”(238年)をそのままに理解し、卑弥呼が朝貢した先は公孫氏であった。そして、急遽朝貢先が魏朝に切り替えられたのではないかと考えたほうが自然ではないだろうか。台与の朝貢についても、魏朝がその朝貢先だったのではないだろうか。265年頃司馬炎が魏朝から禪譲を受け、西晋を建国している。この頃は未だ呉が存続していたので、東方の経営上倭国からの朝貢は大いに歓迎すべきことだった。ここに、266年に倭国から晋国への朝貢があったと記述する所以があったのではないだろうか。

さて、以上を踏まえて次に「魏志倭人伝」と「魏略」の関係について論を進めたいと思う。

岩元正昭氏がWebサイトに「『魏志』倭人伝の原文解釈」という論文を公開されている。岩元氏によれば、公孫氏の倭人支配下時代に書かれた「『公孫志』倭人伝」とも呼ぶべきものがあった。そして、魏朝が公孫氏政権を滅亡させた時、戦利品としてそれが魏朝に渡り、それに魏の時代に即した事柄を書き加えたものが、「魏志倭人伝」や「魏略」の底本になったとされている。倭と韓が帯方郡の属国であった時代に、「『公孫氏』韓伝」・「『公孫氏』倭人伝」といったものが書かれていたであろうことは十分に説得力がある。そして、それらは東方経営を重視していたことから、戦利品以前に魏朝に渡っていた可能性すら考えられるのではなかろうか。

塚田敬章氏がWebサイトに「魏略逸文と魏志倭人伝」という論文を公開されている。塚田氏によれば、「魏略」は魏末期から晋初期に書かれたようであるが、はっきりしない。一方、「三国志」は晋が呉を滅ぼして中国を統一した(280年)後に陳寿が書き始めたとされているので、魚豢の最晩年の頃着手しているとみられ、「魏略」が先行しているのは間違いない。といっても、15年～25年程度の時間差だろうとされている。そして、魏から晋への王朝交代も禪譲という形であり戦乱がなかったので、「魏略」が使用できた資料は後発の「魏志」も使用できた。「魏志」は「魏略」を参考資料の一つとした可能性は残るが「魏略」に頼る必要はなかったと考えられるとされているのである。

このように殆ど同時期に成立した「魏略」と「三国志」(「魏志」)は編纂の意図が異なってい

たものであろうことが推察される。しかしながら、ここではその点に深入りはせず、「魏略」と「魏志」の記述において重要であると思われる差異について検討してみたい。

「魏略」で、“帯方より女国に至るには万二千余里。其の俗男子は皆点而文す。其の旧語を聞くに、自ら太白の後と謂う”と著される箇所が、「魏志」では、“郡より女王国に至るには万二千余里。男子は大小となく皆身に鯨文す。古よりその使いが中国に詣でるや、皆自ら大夫と称す”である。このことの意味するのは、魚豢は邪馬台国が太白の後の呉人の国と認識していたが、陳寿はこれを否定したということではないだろうか。先述のとおり、魚豢と陳寿は同等の歴史資料を参照できたものと思われる。そして、陳寿は魚豢の「魏略」をも参照していた。その上で、陳寿は魚豢の認識を否定した。それは何故だろうか。それは、陳寿が魚豢が入手できなかった新しい情報を入手したことを示唆しているのではないだろうか。

陳寿は蜀の観閣令史であったが、蜀が滅んだ後、晋の武帝時代(265年～290年)に採り上げられ著作郎となり、「三国志」を撰した。そして先述のとおり、晋が呉を滅ぼした280年頃書き始めたのではないかとされている。陳寿が晋の著作郎になった丁度その頃、即ち266年に倭国から台与の朝貢があった。とすれば、陳寿は倭国の朝貢使と会っている可能性がある。会っていないまでも、間接的に最新の倭国の事情を入手できた可能性がある。そしてその情報こそが、“邪馬台国は太白の後の呉人の国ではない”ということだったのではないだろうか。倭国の朝貢使は自分達の祖先について言及した可能性がある。しかしながら、確信が持てなかった陳寿は上記以上のことは記述しなかったということがここでは推量されるのである。

第二章 魏志と後漢書

第一章において記述のように、「魏志倭人伝」は「三国志」の中の「魏書」・東夷伝倭人条に記されているもので、西晋の歴史家・陳寿によって285年頃著わされたとされている。一方、「後漢書」は南北朝時代の南朝宋の時代、432年に成立し編者は范曄(はんよう)とされている。このように、「後漢書」の成立は後漢の滅亡(220年)から200年以上が経ってからのことであり、年代的には「後漢書」より後の時代の範囲を記述している「三国志」の方が「後漢書」より150年位前に成立していた。

しかしながら、後漢を著わした歴史書が范曄の「後漢書」しかないということではなく、八家後漢書といわれるような散逸してしまった後漢書が存在したのである。それらの中には、呉の謝承の後漢書もあるように、魏・呉・蜀それぞれに後漢書を著わしていたものと考えられる。又、それらの中には魏を継承した西晋の後漢書もある。特に、司馬彪(しばひょう)が著わした「続漢書」がある。全83巻の多くの部分が散逸しているが、志8巻は残っており「後漢書」に合刻されるようになったと言われるのである。

この「続漢書」、後漢の光武帝から献帝に至る歴史を記述したもので、帝紀9巻・志8巻・列伝65巻・叙篇1巻からなっていたという。とすれば、列伝65巻の中に東夷列伝が記述されていた可能性もある。司馬彪は306年に没したとされている。ということは、「魏略」も「魏志」も

「続漢書」も概ね同じような時代に記述されていたことになる。「続漢書」はその志8巻が「後漢書」に合刻されるほどの優秀な歴史書であったので、散逸してしまったその他の巻も後に編纂された色々な後漢書に少なからぬ影響を及ぼした可能性があるのではないだろうか。

さて、「後漢書」東夷伝の中に倭の記述があり、日本古代史の重要な資料の一つとなっているのは良く知られるとおりである。そしてそれが、「三国志」魏書・東夷伝倭人条を基に記述されたと言われている。しかしながら、これに対し反論を唱える説もあると言われている。本稿ではそのことに深入りはしないが、以降において、倭に関して「魏志」に記述されない「後漢書」の記述や「魏志」と異なる「後漢書」の記述について検討していきたいと思う。

イ)「後漢書」東夷伝倭人条の中に、“建武中元2年(AD57年)、後漢に倭奴国の遣いが朝貢して印綬を賜った”と記述されている。そして、この時倭奴国王が光武帝から授けられた金印と思われるものが、福岡県の博多湾にある志賀島から出土した「漢委奴國王印」とされる。

ロ)又、“安帝永初元年(AD107年)倭国王師升等が生口160人を献上した”とある。

ハ)更に邪馬台国の記述もあり、“後漢の桓帝・靈帝の時代(AD146年～189年)に倭国中が乱れた。そして、女王卑弥呼を擁立することで治まった”とある。

これらのことは、「後漢書」が後漢の時代を記述する歴史書であり、「三国志」が魏・呉・蜀の三国時代を記述する歴史書であるので「三国志」に記述されない部分があったとしても特段の問題はないものと考えられる。

二)次に、狗奴国の記述である。「魏志」では、“其の南に狗奴国あり、男子を王となす。女王に属さず”。“女王国より東、渡海千余里にしてまた国あるも、皆倭種なり”との記述に対し、「後漢書」には、“女王国より東、海を千里度ると、拘奴国に至る。皆倭種といえども女王に属さず”と記述される。

この狗奴国の位置などについては、邪馬台国の比定地とも関連する大きな問題であり、若干のコメントでは済まされないのである。別章にて改めて取り上げて検討したいと考える。

ホ)最後に「徐福」に関する記述についてである。「後漢書」には徐福の記述がある。そして、「魏志」には徐福についての記述がないが「三国志」・呉書に記述がある。倭人を論ずるに際しては徐福のことは重要なことと考えられる。本章ではこのことの意味について、もう少し掘り下げて考えてみたいと思う。

「後漢書」東夷伝倭人条の記述。“会稽郡の海外に東鯤人がいる。分かれて二十余国を作っている。又、夷州と澶州がある。こう言い伝えられている。秦始皇帝は方士の徐福を派遣し、子供の男女数千人を率いて海に入り、蓬萊神仙を求めさせたができなかった。徐福は罪に問われるのを恐れ敢えて帰らず、ついにこの島に止まった。代々受け継がれて数万戸がある。その人民時おり会稽の市にやってくる。会稽東冶県の人で、海に入り、風に流されて澶州に着いた者がいるが、所在地はあまりにも遠く往来することはできない”。

この前段の東鯤人の件りは、「漢書」地理志(呉地)からの引用とされる。それには、“歳時をもって来たりて献見すという”と記されるので、前漢の時代(BC206年～AD8年)からそのような人々がいて、中国と交流していたということになる。又、後段の徐福についての記述は司馬遷の「史記」からの引用とされる。この中の澶州の位置であるが、台湾や沖縄諸島とする説もあるようであるが、“あまりにも遠くて往来できない”と記されることから、九州方面と考えた方がよさそうである。

解説はその位にとどめて次に、范曄が何故に上記のような引用を記述したのかについて考えてみたい。范曄が「後漢書」を編纂したのは先述のように432年のことだった。その頃は倭国の情報を豊富に中国で入手できていたことであろう。従って、邪馬台国を築いた租人や奴国を築いた租人が誰であるかを知っていたのではないだろうか。しかしながら、「後漢書」は後漢時代を語る歴史書である。それに引用する秦の時代のことや、前漢の時代のことを432年の情報で語ることはできない。そこで、否定はしないものの明確化しないような記述になったのではなかろうか。

一方、「三国志」・呉書の徐福伝聞には次のように記述される。“黄竜二年(230年)、孫権は將軍衛温・諸葛直を遣わし、甲士万人海に浮かびて夷洲及び瀛州(えいしゅう)を求めしむ。瀛州は海中にあり、長老伝えて言う。秦始皇帝、方士徐福を遣わし童男童女数千人を海に入らせ蓬萊神山及び仙薬を求めしむも遂にこの洲に止まりて還らず。”

この記述から読みとれるのは、呉(孫権)は魏に対抗する戦略から、この頃公孫氏を服属させようとすると共に倭国にも接触しようとしていたということである。しかしながら、これが単なる広報戦略であったか、或いはいずれかの倭の国となんらかの接触があったのかなど史実は不詳である。

第一章で、「魏略」が“邪馬台国は太白の後”と記述したことを「魏志」ではこれを否定して記述しなかったことについて検討した。陳寿はそのことが間違いであることを知っていた。そして、それは徐福の後であることを聴いたが確信がもてなかった。それ故に、「魏略」の記述を真正面から否定するのではなく、記述しないという方法でこれを否定したのではないかと推量した。そして上記のように、それと同じようなことが「後漢書」の記述においてもあった。即ち、范曄は「魏志」をはじめとした歴史書や、当時の倭との交流などから、邪馬台国を築いた租人が徐福であることを知りえたのである。しかしながら、後漢時代のことではないので、「史記」の記述を引用することでこれを示唆したものと考えられるのである。

第三章 記紀が語る「邪馬台国」

第二章で記述したように、(范曄)「後漢書」は「史記」、「前漢書」、「後漢書」、「三国志」など先行する中国の歴史書などをもとにして編纂されている。そして成立したのが432年とされている。又、「三国志」(魏志倭人伝)は陳寿が編纂し、285年頃成立したのではないかとされて

いるのである。この両書には倭国の邪馬台国のことや、その女王卑弥呼に関する記述などがある。ところが、日本の天武朝の頃編纂された「古事記」や「日本書紀」にはそれらの記述がないのである。これは一体どういうことであろうか。

「古事記」が712年の成立、「日本書紀」が720年の成立とされている。これを遡る618年に第一回遣隋使が派遣されている。又、630年には第一回遣唐使が派遣されており、各々数次に亘り派遣されているのである。これらのことは、遣使を通じて中国の文物を学ぶ機会が大いにあったことを物語るのである。書物や歴史書はいわずもがなであろう。従って、記紀の編者達は「魏志」や「後漢書」のことを十分知っており、しかもそれらを読んでいたことは間違いないであろう。しかしながら、記紀には邪馬台国や卑弥呼女王の記述がない。

そもそも記紀の編纂が700年頃とすれば、卑弥呼の活躍時代(200年前後)からそれほど経過している訳ではない。そして「古事記」には、その頃のことと思われる多くのことが神代記や天皇記によって語られているのである。それは、皇統譜に繋がる国々のことは言うに及ばず、他にも各地の国々の多くのことが伝えられていたことを示しているのではないだろうか。とすれば、邪馬台国のことや卑弥呼女王のことも伝えられていたはずであり、それを記紀編者が知らないということは考えにくいのである。

では、何故に記紀の編者達は邪馬台国や卑弥呼女王のことを「古事記」や「日本書紀」に記述しなかったのであろうか。このような大胆なことを、記紀の編者が独断で行うことは考えられない。そこには大きな何かの力が働いたのではないかと考えるのが普通のことであろう。本稿では、邪馬台国の比定地を検討したいと考えているが、本章では先ずはこの記紀の謎について検討していきたい。

邪馬台国の時代、即ち卑弥呼や台与の活躍時代は概ね170年から270年の頃と考えられる。それは、173年に卑弥呼が新羅に使いを送ったことが「三国史記・新羅本紀」に記述されていることや、先述のように266年に台与の使者が晋国に派遣されたとされることからそのように判断されるのである。そして、多くの意見ではそれは崇神朝の頃ではないかとされているのである。

記紀においては、崇神天皇は第十代天皇とされている。そして、初代神武天皇から第九代開化天皇までが記述されるのであるが、どうした訳か第二代綏靖天皇から開化天皇までは詳しい業績などが記述されないのが欠史八代と称され、その史実を疑問視するのが通説のようである。本欄(全邪馬連の投稿欄)の小稿「崇神朝(大和)と景行朝(日向)は併存していた」において詳論したように、本稿ではこの八代は史実という立場である。記紀がこの八代を語らないのは、語るに足る治績がなかったからではなく、語るのを避けたかったからであろうと考えた。又、それを遡る時代についても、人代として詳しく記述することを避けて神代として記述しているのは、具体的に語るのを避けたかったからであろうと考えるのである。そしてその理由とは、親百濟系とされる藤原氏が記紀の編纂に関与したことで、スサノオ出雲(新羅系)や卑弥呼日向(徐福系)などの記述を曖昧にしたということだろう。

「古事記」の記述。“高天原という天上界に最初に現われた神は、天の中央にあって天地を主宰する天之御中主神(アメノミナカヌシ)。次に現われたのは、天上界の創造神・高御産巢日神(タカミムスビ)と、地上界の創造神・神産巢日神(カミムスビ)であった”。そしてその後、二柱の神が登場し「別天つ神」と呼ばれる。次に現われる神々を「神世七代」といい、最後の二柱が有名なイザナキとイザナミであり、国生みが始まるのである。

では、アメノミナカヌシ・タカミムスビ・カミムスビとはどういう神々であったのであろうか。それは、日本列島を縄文時代から弥生時代へと変革する、稲作や金属器など画期的な文化をもたらした人々のことを象徴的に表しているものであろうものと考えられる。

まずはアメノミナカヌシであるが、呉の流民の渡来のことを言っているものと考えられる。太白の立てた呉は、BC473年越王勾踐(こうせん)によって滅ぼされる。行き場のなくなった呉の人々は持ち前の海運力を活かして古来交流のあった日本の九州地区を目指す。そして、稲作に適した北九州に上陸し、原住民と融合し建国を進める。遂には「奴国」を興し、AD57年後漢光武帝から金印(「漢委奴国王印」)を賜るまでになるのである。先に記述のように「魏略」では邪馬台国を“太白の後”と著した。魚豢が著した“太白の後”とは上記のことを言っているものと考えられる。しかしながら、それは邪馬台国ではなかったのである。記紀ではこのアメノミナカヌシのことは殆ど語られることがない。それは、末裔も含めて皇統譜の展開に関して主役を演じることがなかったということだろう。

次にカミムスビであるが、これは出雲を支える神であろう。「日本書紀」では、天から追放されたスサノオは新羅のソシモリに降り、そして出雲に渡った後八岐大蛇を退治する。そして「古事記」では、スサノオが殺したオオゲツヒメの残した種を、カミムスビがこれを浄化するのである。又、オオナムジは伯耆国で八百神に殺されるが、カミムスビの手配によるウムガイヒメとキサガイヒメの治療で蘇生する。更には、オオクニヌシはその国造りにおいて、カミムスビの子の少名毘古那神に大いに助けられる。このように、朝鮮半島系の出雲の人々をサポートする位置づけで記紀に描かれるのである。それは、カミムスビが中国渡来系の文化集団であることを示唆しているのではなかろうか。そしてそれは、中田力氏が「日本古代史を科学する」において指摘されているように、第二の呉の流民であるものと考えられる。上記に記した呉を滅ぼした越であるが、BC334年楚(そ)によって滅ぼされてしまう。この時、越の王族・貴族達は南に逃れ現在の福建省の地に閩越(びんえつ)を建てた。しかしながら、越の地に残っていた元々の呉の民は行き先がない。そこで彼らは、呉の滅亡時と同じように海路北へ向かうのである。そして、着いた先は山陰、出雲の地であったと解かれているのである。

最後にタカミムスビであるが、この神は天孫族を支える神として描かれる。「古事記」によれば、その子の思金神は岩戸隠れに際して、天安原に集まった八百万神に天照大神を岩戸の外に出すための知恵を授けている。又、葦原中国平定では派遣する神の選定を行い、その後の天孫降臨ではニニギに随伴している。更には、即位前の神武天皇が熊野から大和に侵攻する時、神武を助けた高倉下の夢にタカミムスビが登場する。このように、タカミムスビは

重大な局面において天孫族に寄り添っているのである。多くの支持を得ている卑弥呼＝天照大神説を採るならば、鬼道を用いた卑弥呼は道教の流れを組むものと考えられ、とするならば、それは道教方士とされる徐福との関係をクローズアップしなくてはならなくなるのである。

さて神代の次の段階では、高天原の神々がイザナキとイザナミに国生みを命じることになる。そして、イザナキとイザナミは国々を生み、国土の神々を生むのである。この二柱の神の記述は極めて重要な意味がある。それは、前述の渡来系の神々を受けてイザナキとイザナミは実際の日本列島内での具体的な活動を示しているからである。即ち、国々としては九州から中四国、畿内まではこの神が支配した。更にその支配を委ねる神々も配置したのである。

では、このイザナキとイザナミとはどのような神なのであろうか。「古事記」では、イザナミは火の神カグツチを生んだ後陰部に火傷を負いやがて死んでしまう。そして、亡骸はイザナキによって比婆山(出雲)に葬られるのである。又、「古事記」によれば三貴神の一柱スサノオはイザナキから海の統治を命じられるが従わず、母の国・根の堅州国に行きたいと願ったため、怒ったイザナキは葦原中国からの追放を命じることになる。やがて追放されたスサノオは出雲国に降りることとなる。こうした記述から考えるとイザナミは出雲の租神と位置づけられていることは明らかであろう。それは、渡来系のカミムスビからの流れを組みスサノオに繋ぐものである。

そして「古事記」には、黄泉の国を訪れて逃げ帰るイザナキに対し、イザナミは「地上の人間を一日に千人殺します」と恨みを込めて言う。これにイザナキは「それなら一日に千五百人産ませよう」と応答するという記述があるように、両神(両国)は相克関係にあった。それも神代の代表的な相克として描かれているのである。イザナミは出雲の代表神である。では、イザナキはこの頃のいづこの代表神となるのであろうか。

黄泉の国から逃げ帰ったイザナキは、日向の阿波岐原で禊を行い、三貴神(天照大神・スサノオ・月読命)を生む。この一柱・天照大神＝卑弥呼であるならば、それは徐福一行の末裔であることの可能性について先述した。しかしながら、スサノオと諍いを起こしたり、誓約を交わしたりする天照大神の時代は卑弥呼の活躍時代とは時代が異なるのである。では、天照大神とは誰かという問題となる。

先に述べたように、天照大神の時代を記紀は神代として記述した。そして、記述すべき史実に煙幕を張ってしまった。そこから史実を浮かび上がらせるには、記紀の記述をトレースしてもそれはなかなか難しい作業となるであろう。従って、それには大胆な仮説の設定が必要になってくるものとする。

まずは、“スサノオと天照大神との誓約”とは何かである。これは、スサノオによる天照大神の略奪婚とすると辻褄が合ってくる。出雲を纏めたスサノオが九州に進出してくる。そして、イザナキとその娘・天照大神との相克の後これを征服、天照大神を娶るのである。この略奪婚の間のことを記紀は“天岩屋隠れ”という。そして、やがてスサノオが亡くなり、天照大神が天

岩屋から解放されて出てきて采配を振るうこととなる。

次に、“天孫降臨”とは何かである。「古事記」では、高天原の地上界の支配が確定すると、いよいよ統治者を派遣することとなる。そこで任命されたのが、天照大神の子のオシオミミの子・ニニギであった。このニニギの天孫降臨の経路については、崎元正教氏がWebサイトで発表されている「日本建国史の復元」に詳しい。そしてそれは、オオナムジが日向に進出した経路と重なることを論証され、ニニギ＝オオナムジと結論づけられているのである。崎元氏によればニニギ(オオナムジ)一行は、“筑前・豊後方面から1600メートルを超える山々が壁のように立ちのぼる祖母傾連峰を越え、高千穂町岩戸の天岩戸神社、三田井の櫛触神社、高千穂神社あたりを經由して高千穂峡で有名な五ヶ瀬川上流に出て、そこから五ヶ瀬川沿いに延岡の方に東下していった。そして、そこから南下し西都原に進出して行った。”と分析しておられるのである。オオナムジは出雲においてスサノオの娘・スセリヒメと結婚し、スサノオの命により宇佐・日向の統治に向かうのである。そして日向においては、スサノオと天照大神の娘タギリヒメ(宗像三女神の一柱)を娶るのである。このように論を進めると、天照大神は日向の神であることが明らかになってくる。とすれば、その親であるイザナキも日向の神としなければならないだろう。

「日本書紀」では、その神功紀において伊勢の五十鈴宮の神が向津姫であると言っている。伊勢神宮の神といえば天照大神である。そのさり気ない記述から、記紀編者の大いなるメッセージを受け止めねばならないだろう。即ち、スサノオが日向において略奪婚に及んだのは、イザナキの娘・向津姫だったのである。そして、スサノオと向津姫との娘・タギリヒメをオオナムジが娶るという流れになるのである。

さて、いよいよ次には天照大神が徐福系であることを論証しなくてはならない。先述のとおり、渡来系の神・タカミムスビの子の思金神は天照大神の天岩戸隠れに際し、天照大神を岩戸の外に出すための知恵を授けている。そして、岩戸の前でアメノウズメ命が神がかりとなり神と通じる様は、正しく神社と巫女の原形であろう。これらの事は、「魏志」でいう“宮室は樓觀・城柵巖かに設ける”、“鬼道に事え能く衆を惑わす”からきているものと考えられる。徐福一行がもたらしたものは稲作や金属精錬技術などと共に道教の教えも重要であった。これが日本流にアレンジされて神道として発展していくのである。記紀の編者はこのことを知っていたとしか考えられないだろう。

第四章 倭国大乱と張政

第三章で記述のように、邪馬台国はどうも日向ではないかということが濃厚となってきた。そして、それは徐福一行の末裔ではないかと考えられるのである。本章では「魏志」に記述される経路を見つめなおして、もう少し具体的に検討していきたい。

「魏志」に記述される邪馬台国に至る経路については、誰の何時の報告にもとづくものかと

ということが先ずは問題となろう。先述のとおり、倭国が公孫氏に属していたとするならば、その交流を通じて相当程度の情報は把握されていたものと考えられる。それらに加え、正始元年(240年)に太守の弓遵は、建中校尉・梯儁(ていしゅん)らに詔書、印綬を持たせて倭国に遣わしていることや、張政らを倭に派遣して皇帝の詔書や黄幢を拝仮させているので、これらの者の報告書が「魏志」に反映されていることも想像に難くない。

「魏志」には魏の帯方郡から倭の邪馬台国までの里程が記述されている。それを簡略に示すと、帯方郡→狗邪韓国→対海国→一大国→末廬国→伊都国→奴国→不弥国→投馬国→邪馬台国となっている。これらの内、狗邪韓国と伊都国は到狗邪韓国、到伊都国と記述されることから一つの到達点ではないと言われるのである。狗邪韓国は全行程万二千里の七千余里の所にあるので中継地としての到達点として理解できる。又、伊都国については「魏志」に“郡使の往来常に駐する所なり”と記されることから、梯儁ら派遣団の到達地として理解することも可能だろう。

梯儁ら派遣団は伊都国に駐在していた可能性が濃厚である。それは、女王卑弥呼が伊都国に来たとか、梯儁らが邪馬台国に行って女王卑弥呼に会ったという形跡が「魏志」の記述に表れないからである。「魏略」には伊都国以降の記述が見られない。それは散逸によるものかもしれないが、「魏略」は公孫氏時代の情報で記述されたのではないかと推量される。これらのことを総合すると、どうも梯儁ら派遣団は伊都国に駐在していて、伊都国以降のことは参問によって得た情報ではないかと思われてくる。彼らは伊都国より先には行っていない。何故なら、伊都国より先は極めて危険な区域だったからである。里程において示される各国の情報の中に、官職の記述がある。その中で共通して副官“卑奴母離”を置いている国がある。それは、対海国・一大国・奴国・不弥国の四つの国である。対海国は現在の対馬、一大国は現在の壱岐とみることで概ね異論がないようである。そして、通説では奴国は現在の博多付近、不弥国は飯塚市或いは宗像市などで議論がされている。いずれにしても、これら四つの国々は共通して副官にヒナモリを置いていた。ヒナモリとは夷守、即ち軍事長官のことを意味するとされるのである。では何のためにこれらの国に軍隊を置いたのであろうか。それは、これらの国々の位置関係からいって“東の倭種の国”の侵攻を防ぐべく対峙していたとしか考えられないのではないだろうか。

先述のように「後漢書」の記述には、“後漢の桓帝・靈帝の時代(AD146年～189年)に倭国中が乱れた。そして、女王卑弥呼を擁立することで治まった”とある。これに関しては「魏志」にも次のような記述がある。“その国も、もとは男子を王としていた。そうした状態が7、80年続いた後倭国が乱れ、お互い攻撃しあうようになり何年か過ぎた。そこで共同で一人の女子を立てて王にした。名を卑弥呼という”とある。卑弥呼の共立で倭国内は治まったかの様相であるが、更に「魏志」には次のような記述がある。“女王卑弥呼は狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。郡に使いを送り相攻撃する状況を説く。郡は、張政らを派遣して、詔書・黄幢

を授与し、檄をつくって告諭させた”のである。

この狗奴国の位置を巡っては、邪馬台国の比定地と同様諸説展開されていて確定するのは容易ではない。先に記述のように、「魏志」では“其の南に狗奴国あり、男子を王となす。女王に属さず”。“女王国より東、渡海千余里にして又国あるも、皆倭種なり”である。これに対し、「後漢書」には“女王国より東、海を千里度ると拘奴国に至る。皆倭種といえども女王に属さず”と記述される。

ここで前述のヒナモリの布陣を思い出していただきたいのである。そこでは、四つの国は“東の倭種の国”の侵攻を防ぐべくヒナモリを配置したのであった。従って、拘奴国とはこの東の倭種の国に相当するのである。そしてそれは、女王国を連合国と理解するならば、女王国の東、海を渡って千里にあるのは出雲国ということになるのではなかろうか。

ところで、派遣された張政はどこで何をしていたのだろうか。張政の役目は詔書などを授与し、檄をつくって告諭することだった。張政は曹掾吏(国境警備の属官)だったので何がしかの部隊を率いていたものと思われるが、戦闘に参加する大部隊を率いたものではなかった。従って、役目を果たすため相攻伐するような危険区域には行かなかったものと考えられる。

「魏志」の記述に里程に登場する各国の戸数がある。多くの国は“戸”と記述されるのであるが、一大国は“三千ばかりの家あり”と記され、不弥国は“千余家あり”と記される。この違いとは何であろうか。それは、通り過ぎた国と張政らが滞在した国の違いということではないだろうか。即ち、張政は役目を全うし、身の安全を図るため九州には上陸しなかった。そして、一大国にいて戦況を監視していたのである。しかしながら、最前線の不弥国には部下を派遣して、その戦況を探らせていたのである。張政の報告書にはこの二国の家数が記載されていた。これらのことを陳寿が採り上げたということではないだろうか。

では、東にある倭種の国が拘奴国であることを陳寿が知りえたとしたら、「魏志」において何故その南に狗奴国があると記述したのであろうか。「魏略」が公孫氏時代の情報(誤認)までで記述したとすればそれは理解できる。では、陳寿がそれを踏襲したのは何故だろうか。それは、拘奴国の背後に呉がいたからではないだろうか。陳寿が「魏志」を書いている頃には未だ呉(222年～280年)が存在していた。だから、魏に朝貢している邪馬台国が、呉と組している拘奴国に苦戦しているような記述は描けなかったものと推量されるのである。しかしながら、後の「後漢書」においては范曄はこれを糺し、史実どおりに描いたということではないだろうか。

このように論を進めてくると、AD57年に後漢・武帝から金印を賜った国、そして「魏志」では“二万余戸あり”と記される大国の奴国が、天御中主神を祖とする国としていいのではないだろうか。又、拘奴国はどうも出雲にあったようである。そして、卑弥呼を女王とする九州連合国と伍して相攻伐していたほどの国である。これこそ、カミムスビを祖とする国としていいのでは

ないだろうか。では、タカミムスビを祖とする国とは一体どの国になるのだろうか。先述のとおり、タカミムスビは日向の神であることが推量された。タカミムスビは記紀の描くこの頃の三大勢力の一つであった。とすれば、拘奴国と対峙していた邪馬台国こそタカミムスビを祖とする国としなくてはならないだろう。

「魏志」では、伊都国或いは不弥国から邪馬台国までの行程を、“南に水行20日で投馬国に至る。五万余戸ある。そして南に行けば邪馬台国に至る。水行10日、陸行1ヶ月。七万余戸ある。”と記述する。この部分の解釈を巡って江戸時代から300年の間邪馬台国の比定地論が展開されることになる。この間、古今の学者や歴史家がこの部分を何百万回、何千万回反芻したことだろう。しかしながら、未だに史実が確立されていないのである。

この部分の数値に捕われていると議論の収斂は殆ど望みがないだろう。そこで、この部分の数値を外してみたら如何であろうか。“南に何日か水行すると投馬国に至る。結構大勢住む国。そして南に行けば邪馬台国に至る。何日かの水行、何日かの長い陸行。結構大勢住む国。”となるのである。

「魏志」では邪馬台国(倭人国)の位置を、“其の道理を計るに、まさに会稽東冶の東にあるべし”と記述した。従って、北九州地区から相当南にいかないとならない。そのために誇張して日数を記述した可能性がある。或いは、郡の官の参問に答えた邪馬台国の係官が、強大な国であることを示さんがために遠隔地にある大勢住んでいる国と虚勢を張った可能性もある。いずれにしろ、万二千里という総里数から考えて邪馬台国は九州内としか考えられないのではないだろうか。

では、投馬国とはどこに位置するとしたらいいのだろうか。それは、豊前・豊後あたりの海岸に面した国とすると整合性がとれてくる。そして、邪馬台国はそこから南に何日か水行して至る国、或いは何日か長い陸行で至る国である。そこは日向・西都原ということになるのではないだろうか。ここに至り、先に記述のニニギ(オオナムジ)の天孫降臨の経路を思い出さないだろうか。ニニギ(オオナムジ)は、筑前・豊後方面から祖母傾連峰を越え、高千穂から延岡に下り、西都原に進出したのだった。古来、豊後方面から陸行で西都原に行くルートがあったのである。舟を用いれば早くに到達できたであろうが、陸路もまた使われていたということではないだろうか。

第五章 卑弥呼と台与

宝賀寿男氏がNETで「邪馬台国論争は必要なかった」という論文を発表されている。宝賀氏はその中で、橋本増吉氏の著作「邪馬台国論考」を採り上げ、その所謂”重ね写真説“というものを紹介されている。それによれば、“「魏志」の編者陳寿は大和の崇神朝或いは景行朝を知りえたので、九州から大和に至る日程をもって不弥国より邪馬台国に至る日程と誤認し、為、不弥国から邪馬台国に至る里数を棄てその誤認した九州から大和への日程記事をもって之に代えただけに過ぎないものである。よって、主として里数記事を採り(不弥国からの残

里数・1300里)、日程記事を排するをもって正当とする“というものである。

これに対し宝賀氏は、崇神朝(四世紀前葉の後半とされる)の存在などが四世紀後半に中国に伝えられたとは考えにくいことから“重ね写真説”を成立困難とされている。そして、“水行陸行”の記事は、「三国志」が何回か書写されていることから、後世の竄入ではないかというのである。この記事が「魏略」に見えないこともあるが、「魏志」以外で最初にみえるのが629年に成立したとされる「梁書」であり、この頃は遣隋使も派遣されており、大和王権の存在や位置が中国側に知られていたからという。「魏志」の“水行陸行”を整合的に考えようとする、“水行陸行”を除去し、後世の竄入とみる他ないとされているのである。

上記は邪馬台国九州説に立つものである。一方、邪馬台国畿内説の場合は“水行陸行”の方位を「魏志」に記述される南を東と読み変えるのである。そして、日本海経由か瀬戸内海経由かの違いはあるものの、邪馬台国は大和に存したとするのである。畿内説では、卑弥呼を「倭迹迹日百襲姫」(やまとととひもそひめ)・第7代孝霊天皇皇女)に比定し、その墓を箸墓古墳(奈良県桜井市)とするのが主流となっているようである。

本稿では邪馬台国を日向・西都原に比定した。本稿の説にしても上記に掲げた諸説にしても、いずれも“水行陸行”の見方や解釈などによる仮説である。この仮説をより信憑性のあるものに近づけるためには、更なる根拠や傍証を示さなくてはならないだろう。そこで次に、卑弥呼の人物比定と墓の比定に論を進めていくこととする。

本欄(全邪馬連の投稿欄)の小稿(「倭国大乱と崇神擁立は同時進行していた」及び「崇神朝(大和)と景行朝(日向)は併存していた」)にて記述のように、初代神武天皇から第15代応神天皇までの時代は、王朝が畿内にあつて全国に覇権を主張するような確固たるものではなかったものと考えられる。それは「古事記」の構成からも推論される。即ち、「古事記」においてはその上巻(うえつまき)で神々の誕生から神武天皇の誕生までを記述する。そして、中巻(なかつまき)では初代神武天皇から第15代応神天皇までを記述し、下巻(しもつまき)で第16代仁徳天皇から第33代推古天皇までを記述しているのである。これを一言でいうなら、上巻は神代期、中巻は九州朝と畿内朝の併存期、下巻は畿内朝の覇権拡大期とでも言えるのではないかと考える。

記紀では初代神武天皇から第15代応神天皇までを、畿内に宮がありあたかも連続しているように描くのであるが、果たしてどうであろうか。記紀が第2代綏靖天皇から第9代開化天皇までについて多くを語らないため、欠史八代としてその存在を否定する説があるように判然としない時期となっているのは確かである。そうは言っても、何か仮説を立ててこれをクリアしない限り次に進むことができないのである。そこで、第8代孝元天皇と第9代開化天皇を切り離したらどうかと考えた。第8代孝元天皇の諱は“大日本根子彦国牽天皇”である。そして、第9代開化天皇は“稚日本根子彦大日天皇”である。それまで何代か続いた“大日本”から“稚日本”に変節しているのである。ここに謎を解く鍵が隠されているのではないだろうか。

欠史八代の内、第7代孝霊天皇(大日本根子彦太瓊天皇)と第8代孝元天皇は諱に“大日本根子”が付けられている。この“大日本根子”が意味するのは、大「日本」(やまと)=もともと「倭」(やまと)=邪馬台国と解すれば、日向の邪馬台国と理解できるのではないだろうか。即ち、この間は日向王朝のことを記述しているのである。そして、次代の第9代開化天皇が“稚日本根子”であり、これは大「日本」(やまと)から実権が委譲されたことを意味する、稚日本(わかやまと)=新日本と理解すればいいのではないだろうか。本欄の小稿(「倭国大乱と崇神擁立は同時進行していた」)でも記述したが、投馬国は豊後界隈にあり、それは日向に土着した徐福一行が開拓した国であると考えている。そして、その後裔達は丹後に進出していることを記述した。ここでは詳細は省略させていただくが、上記の“稚日本”こそ豊後の投馬国であろうと推論するものである。

では次に、いよいよ推論を具体化していきたいと思う。まずは卑弥呼の人物比定であるが、これについても諸説あって、又それなりの推論する根拠があるので確定するのは至難のことである。しかしながら、「魏志」をはじめとして中国の歴史書に記述されるほどの人物であれば、日本において特別の存在であり、これを無視するようなことは考えられないだろう。従って、記紀の記述においても相応の記述があつてしかるべきではなかろうか。そのように考えると、諸説ある中でも、その人物は“天照大神説”、“神功皇后説”、“倭迹迹日百襲姫説”に絞られてくるのではないだろうか。

天照大神は本稿において既に日向の向津姫に比定したところであり、対象から除外する。神功皇后については、卑弥呼の活躍時代を200年前後とすると、どうも時代が少し合わないようである。とすれば、倭迹迹日百襲姫(以下百襲姫)が有力となってくるが果たしてどうであろうか。

百襲姫は記紀では第7代孝霊天皇の皇女である。百襲姫は、大物主神が依り憑いたり、武埴安彦の謀反を予知したりして巫女的な役割をもって描かれる。「魏志」でいう“鬼道に事え、能く衆を惑わす”に合致する。そして、“狗奴国(出雲)の男王卑弥弓呼と素より和せず”は、大物主神(出雲系)とのやりとりで描いてみせた。“以って死す”を箚で陰部を刺して死に至ったと鮮烈に著わした。死後卑弥呼の墓が造られる、そこには百人の奴婢が殉葬される。百襲姫の名前はこのことに所以があるとする説は少なくない。

以上のように、卑弥呼=百襲姫説の可能性が濃厚である。しかしながら、邪馬台国九州説にとって最後の難関は、記紀の記述から考えると百襲姫は畿内に在住していたとせざるを得ないことであった。これについても、先述のように九州朝と畿内朝が併存していたとすることでクリアできるのである。百襲姫は第7代孝霊天皇の皇女として、“日向”(邪馬台国)に生まれる。同じ頃、“豊後”(投馬国)に生まれたのが第9代開化天皇であった。その兄弟に大彦命がいた。開化天皇の子が第10代崇神天皇である。そして、大彦命の娘が御間城姫であり、やがて崇神天皇の皇后となる。この図式を念頭に入れておいて、次のストーリーに進みたい。

この頃(紀元2世紀頃)、かつてのような勢力に盛り返してきた“出雲”(狗奴国)は、北九州

や吉備、畿内などに覇権を主張してきた。そこで日向の採った戦略は百襲姫(卑弥呼)を女王に擁立し、北九州で出雲と相克しつつ、吉備や畿内などにおいて出雲を征討することだった。派遣されたのは開化天皇や大彦命等々だった。記紀では四道将軍は崇神天皇が派遣したと記述されるが、それは百襲姫(卑弥呼)だったのである。そして、ある程度東国(ここでは畿内界限を意味する)の地盤が固まった後、崇神天皇が大彦命の娘・御間城姫に入り婿として入り、第10代天皇を名乗ることになるのである。

さて、次に卑弥呼の墓の比定であるが、これについては誰が卑弥呼の墓を造ったかということが問題となろう。これについても諸説あろうが、本稿では卑弥呼の墓を造ったのは宗女台与(トヨ)とすることが妥当ではなかろうかと考える。とすれば、台与とは何処の誰かということを先に論じなければならいだろう。

結論を先に言えば、それは崇神天皇の皇女である豊鍬入姫命(以下トヨ)に比定して考えてみたい。崇神6年、流行していた疫病を鎮めるべく従来宮中に祀られていた天照大神と倭大国魂神を皇居の外に遷した。そしてオオモノヌシを三輪山に祀ることで疫病は収束するのであった。その後、外に出された天照大神は皇女・豊鍬入姫命に託され檜原神社(奈良県桜井市・大神神社摂社)に一旦鎮座される。そして、垂仁天皇の時に現在の伊勢神宮内宮に鎮座されたとされる。では、崇神天皇が天照大神と倭大国魂神を皇居の外に出した後、皇居に祀られたのは誰だったのであろうか。それは卑弥呼とする以外には考えられないのではないだろうか。記紀は卑弥呼を皇居に祀ったことを記述しない。そして、倭迹迹百襲姫を巫女にしたてて疫病を鎮めたように描くのであるが、これは、皇居に祀られたが記紀に記述を隠された卑弥呼と、巫女と記述された倭迹迹百襲姫とが同一人物であったと考えたほうが理解し易いのではないだろうか。

やがて、卑弥呼が亡くなる。そこで男王を立てるも世の中は再び乱れる。その理由は卑弥呼の墓の造成にあったろう。長い戦乱で疲弊していた九州地区の豪族にとって、更なる負担が不満のもとだった。これを解決すべくトヨが立てられたのである。トヨは崇神が天皇に擁立された以降も投馬国にいた。13歳にして既に鬼道に長けていたのだらう。「魏志」はこれを“國中遂に定まる”と記述するのである。

豊鍬入姫(トヨ)は崇神の皇女として投馬国に育った。卑弥呼が亡くなり男王(邪馬台国・景行)を立てるも治まらなかった。そこで、豊鍬入姫(投馬国・トヨ)が女王に擁立され世の中が収まるのであった。トヨの一番の仕事は卑弥呼の墓を造ることだったろう。場所は人員を集める利便性もあり、地元の宇佐地区が選定されたものと考えられる。宇佐神宮の祭神は、現在は八幡大神(応神天皇)、比売大神(宗像三女神)、神功皇后とされるが、起源はもっと遡るのではないだろうか。崇神天皇によって皇居から出される前に皇居に祀られていたのは天照大神と倭大国魂神であった。とすれば、宇佐神宮に祀られていたのも天照大神と倭大国魂神と考えるべきであらう。そして皇居に卑弥呼が祀られたと同様、宇佐神宮においても卑弥呼を祀ったものと推量されるのである。

全国邪馬台国連絡協議会の鷺崎弘朋会長が、Webサイトに「卑弥呼と宇佐神宮比売大神」という論文を掲載されている。鷺崎氏はこの中で卑弥呼の墓(百余歩の冢)=宇佐神宮の亀山と比定されているが、この可能性が濃厚である。

トヨはこの後、景行を助けて九州地区を纏める。629年に成立したとされる「梁書」には晋の泰始2年(266年)倭の王が西晋に朝貢したことが記述される。曰く、“卑弥呼の後宗女台与が王となる。その後男王が立つ。中国の爵位を並び受けた”である。

では、トヨの墓はどこにあるのだろうか。それは、トヨの後を受けて男王となった景行の居していた地、日向の西都原古墳群の中にあるのではないだろうか。

了

<自己紹介>

- ・ 筆名 たかみやしんじ 1947年 長野県下諏訪町生まれ。
- ・ 東京都稲城市 在住。
- ・ 「全邪馬連」入会 2015年7月。
- ・ 趣味 古代史愛好 高爾夫球。
- ・ 「全邪馬連」投稿歴 「倭国大乱と崇神擁立は同時進行していた」
2015年10月
「二つの天孫降臨は連動していた」
2016年4月
「国譲りは関東で繰り広げられていた」
2016年10月
「崇神朝(大和)と景行朝(日向)は併存していた」 2017年4月
「古代東国にやってきたのは出雲だった」
2017年10月